

グローバルに 思考し、 ローカルに 暮らそう！

「あらし山の夢」

客員研究員

清水 和繁



(財)えひめ地域政策研究センターのまちづくり活動部門なるものに5年間に籍し、いろいろな人や様々な価値観に出会った。記憶に残った人々や事柄は私が潜在的に持っていたものと同根であり、この間、どうやら私は人生の「たな卸し」をしたと言っている。

原風景をまもり創造するのが「あらし山」流

忘れもしない04年の大寒の日に、父が病で倒れた。八幡浜市日土町のみかん農家の長男に生まれた私は、生まれ育った我が家とみかん山をどうするかいきなり



あらし山で清見を収穫しながら花見を楽しむ！

対応を迫られ、温州みかんや伊予柑・ポンカンを切り、桜や山茶花・椿を植えた。この年の4月にセンターで仕事をしようになり、まちづくりや地域づくりの人たちと出会うことになる。

最初に出会ったのが岡崎直司さんであった。みかんの樹を切り、桜や山茶花・椿を植えたことを私から聞き、「みかん山をアラシヤマにするのか」という彼の一言を「荒らし山」と聞き覚え、先祖からのみかん山を荒らすのかと受け取っ



宝物になった柳原あや子さんの水彩画「あらし山・山荘」

た。みかん山に桜や山茶花などの花木を植えたので、京都の嵐山のようにするのかという岡崎さんの何気ない一言から、「あらし山」が生まれ、この時から「先祖伝来の家を荒らし、みかん山を荒らす」と称し、生まれ育った自宅を「あらし山・山荘」と名づけ、松山と八幡浜の二地域居住を地でいくことになる。この瞬間、私の中で田舎が負債から資産に変わった。

一編の詩との出会い

ステイグ・クレッソンの「豊かさとは幸福を問い直す」という詩は、少なから



研究員卒業レポート

ず私に衝撃を与えた。スウェーデンのことながら、この詩が、農業が衰退し、地域社会が変貌する様を映し出していたからである。

「豊かさ」と幸福を問い直す（抜粋）

わが国は豊かな国となり「繁栄」と呼ぶ状況を生み出した。人々は大きな単位、大きな「コミュニティ」を信じ、都市には遠い将来にわたって労働が存在すると信じた。私たちは当然のことながら物質的に豊かになつたが、お互い他人同士となつた。小農民が消滅するとともに、小職人や小商店が、あの小さな学校、あの小さなダンスホールなども姿を消した。そういう小さな世界はもう残っていない。小さいものは何であれ、儲けが少ないうちが理由だつた。なぜなら、幸福への呪文は「儲かる社会」だつたからだ。

戦後の高度経済成長を経て、世の中が画一化し、大量生産・大量消費の時代になると、地域にあつた暮らしや食は変貌した。地域が自立するには、地域の中に強い産業があることが大切だが、どれだけかかっても絶対に、つくり直せないものがある。それは、日々の暮らしの長い時間の積み重ねで紡がれてきた目に見えない資産である。これからは、大地に暮らす人々が最終決定権を持つ時代になる。田舎は自然のリズムと調和をしており、時間がゆつたり流れているので息の長い取り組みが可能である。グローバルな視点でものを見て、小さな経済圏をつくりたい。（昼寝をするのも最高であるが…）

私塾ネットワークをつくらう

宮沢賢治に憧れて農芸化学を専攻し、土壌肥料の技術者として農地の土壌診断をしながら、県内各地を歩いた。ふと気がつくとき、技術者として彼と同じ志を持つて歩んできたような気がする。宮沢賢治は、農学校を退職後、羅須地人協会を設立し、農民に稲の生産改善を直接指導するかたわら、農民芸術論を説いた。このことを教えていただいたのが、山形県高島町の星寛治さんである。

教育が国のものとなる前は、全国各地



星寛治さんを囲んで開催した「年輪塾」公開セミナー

に私塾があり、読み書きやソロバンから人間教育まで様々なスタイルの教育活動が展開されていた。それが江戸時代の教育水準は世界トップクラスであつたという結果をうみ、坂の上の雲の時代に結実した。

若松進一さんが、人間牧場で「年輪塾」を開塾される折に、塾頭をしないかとお誘いを受けた。あらし山で宮沢賢治の羅須地人協会のような私塾を開きたいという思いを抱いていたのでお引き受けすることにし、今までの経験からリアルとバーチャルの融合を目指した私塾スタイルに挑戦している。星さんから、現代の羅須地人協会をつくりなさいとのアドバイスを受け、様々な価値観を持った私塾を結んだネットワークづくりが私の夢となつた。

出合いとは不思議なものである。決して偶然ではない。人は基底部に同じものを有している人と出会うのだという。出会ったり離れたりしながら、自分の器にあつた人と繋がっていく、どのような出合いをするかは自分次第らしい。どうやら天は私にまだ何かをさせたいようである。